

次元転換  
される  
超古代史

これが日本精神  
《真底》の秘密

[新装版]

# 正統竹内文書

# の日本史「超」 アンダーグラウンド

竹内睦泰  
秋山真人  
布施泰和

秋山氏が異次元からUFO発光体を呼び寄せた！ 布施氏が受けた啓示から解読した伊豆と山岡町を結ぶピラミッドライン！ 竹内氏の口伝から尖山を中心とした古代の情報網が見えた！



ヒカルランド

1 はじめに

## 第一章 天空浮船(UFO)と古神道的世界

### UFO観測会レポート(布施泰和)

- 19 雨中に出現した「見えないUFO」
- 23 物質化する前にオーブとして現れたUFO
- 28 フラッシュに反応して瞬時に「星々」が光る
- 30 葉巻型母船登場!?! — 別の空間から聞こえてきた飛行音
- 34 UFOは星座の形で写り込んでいた!
- 39 それぞれの故郷の星系からやって来た「UFO」たち

## 第二章

### 巫女と審神者と占い

- 41 丑三つ時にセミが鳴き、風と共に現れた
- 44 「宇宙人ゲルは子機を従えて出現し、そして飛び去った」
- 46 やはりUFOの配置にはメッセージが隠されていた！
- 49 突然始まった秋山氏の自動書記は母船からのメッセージ
- 53 宇宙との交信は古神道の秘儀にも通じていた！
- 一、精神世界には自由への魔法のカギがある
- 良し悪しを超えて味わいの境地へ（秋山真人）
- 62 ミディアム、チャネラー……言葉の定義をわかって使っていますか？
- 64 公務員の巫女と地方に散った非合法の市子の二重構造
- 66 「受動的な能力」には八種類の感じ方がある
- 69 物質に影響を与える、念を飛ばす「能動的な能力」もある
- 70 マスコミをにぎわす、おしゃれな偽物能力者
- 74 能力者にとって五〇越えは難しいのも事実

- 76 医者と能力者は共存共栄すべきであった
- 79 日本の宗教法人の在り方は間違っている
- 80 教えることで本人がよく覚える
- 82 感じることに、念じることのバランスが大事
- 84 「感じる」ために毎日同じ所作をしてみよう
- 85 巫女と審神者にも占いは必要
- 87 占いの偶然律で「整い」と「乱れ」を読む
- 88 「私を超えろ」——本物の師は弟子をとらない
- 91 自由になるための「自己洗脳」の勧め
- 94 自由になれるかどうかがこの世界のバロメーター
- 二、脈々と続く歴史の陰に忌部と卜部がいた  
審神者として圧倒的な力を振るった武内宿禰（竹内睦泰）
- 104 応神天皇の父親は誰か？ 皇子を抱く武内宿禰
- 105 巫女の感性と審神者の知識が連動して神占いがある
- 106 忌部は姿を消して卜部は生き残った

- 109 大嘗祭の式次第を知っていた織田信長は天皇になれた！
- 111 竹内家は陰陽師を率いた時期があった！
- 113 竹内家に伝わる秘伝・天津金木あまつかなぎと盟神探湯めいじんたんたう
- 115 統治王より祭祀王のほうが上であった
- 119 「参考資料」大祓の祝詞おほほらえのりごと
- 三、物書きも巫女であり審神者である
- ペンの神様が宿るとき文章は溢れ出すあふ（布施泰和）
- 126 挫折によってうまくなる作文力
- 128 入社一二年目、ペンの女神がほほ笑むまで
- 130 書く前にすでに出来上がっている論文
- 132 校閲・校正作業時に現れる直観と審神者こうえつ
- 135 「直観」との丁々発止の議論の末にできる文章も
- 137 夢占いの始まりは「美レイヤー」と「天美卵」
- 141 最初に現れたメッセージは「天火同人」
- 143 夢に現れた山と数字の謎を解明！

### 第三章

#### 神靈界と宇宙の仕組み

- 147 シンボルに込められた二重、三重の意味  
149 直観により導かれた山岡町の南中線  
152 笠置山かさぎやまと伊豆のラインが一致！  
154 正統竹内文書が明かす、尖山を中心とした古代の光通信網

一、どの世界を選択しても正解などない  
この宇宙の本質は自由（秋山真人）

- 163 千差万別の靈界論に共通点ありやなしや  
166 死への恐れが作り出す靈界論のドグマティズム  
169 地球は不自由不自由を楽しむ世界  
171 地球は面白いところなので、つぎつぎと魂が集まってくる  
174 不自由不自由の地球人の本質は、自由自在の神の欠片かけら  
176 真の念力トレーニングは、他人のせいにならないこと！  
177 憑依靈や生靈もその人のファッション

二、へひも理論のゆらぎ——これが竹内神道の宇宙観だ！  
霊も人もへモノもすべては神である（竹内睦泰）

185 正統竹内文書の口伝——釈迦は月読命の子孫

187 物質を超えた〈靈子〉が国常立尊くにとこたちのみことだった！

190 〈音〉を〈言葉〉として理解した日本人の宇宙観

192 無の神「モトスミクライヌシノカミ」から多くの神々が生まれた

194 竹内神道では無の神が至高神

三、目に見えない生命体はすぐそばに存在する

この宇宙には信じられないほどの多様性がある（布施泰和）

197 ゴスペル・コンサートで目撃したエネルギーボール

199 オープは意識で見えるもの、意識しないと見えない

202 特定のリズムや音楽によって招かれる霊

203 人間には魂だけが知る深い思いがある

206 お互いに影響し合っている霊の世界とこの世界

## 第四章 神代文字と宇宙文字

一、細胞が原初的に覚えている宇宙文字がある  
本能から生まれるアートが神代文字（秋山真人）

211 特定のシンボルに込められた共通の意味合い

214 本当の神代文字はアーティスティックなもの

216 魂の雄叫びを描いたものが宇宙文字や神代文字

219 神代文字は音叉や水面や炎から生まれる

221 自由な表現として神代文字や宇宙文字がある

二、神々や神代の人々はテレパシーで話していた

日本にあった文字がシュメール経由で世界に伝播した！（竹内睦泰）

224 「神字」（カムナ）が漢字となりカタカナとなった

226 日本に移住した百済・高句麗の王の末裔

227 神代文字はきりがいいほどたくさんある

229 神代にはテレパシーによって意思疎通していた

三、世界共通の文字や言語は存在した

巨石文明に残る普遍的な記号群の謎（布施泰和）

233 欧州各地で見られる古代の渦巻き紋様

238 縄文人の心に戻るとき縄文は文字として蘇る

## 第五章 「青森現地取材」正統竹内文書と超古代史の謎

一、古代津軽・十和田王国の謎（布施泰和）

243 謎多き太古の神都・十和田高原を訪ねる

244 「キリストの遺言」は誰かが改ざんした可能性がある

248 口伝ではキリストは最後、南極に渡っていた！

252 祭壇磐境と石切彦には深い関係が

254 小牧野の環状列石は石神様を示していた！

259 古代人の旅の道標としてのストーンサークル

- 260 ストーンサークルが各地の「石神様」を結ぶ
- 264 天皇家の歴史とは真逆の秘史を伝える東日流外三郡誌
- 266 残党討伐を命じられてキリストは東北にやって来た
- 270 坂上田村麻呂に滅ぼされた「幻のアラハバキ王国」
- 271 長慶天皇はユダヤ人○支族の子孫に助けを求めた!?
- 273 長慶天皇最期の地となった六戸の天皇山
- 276 日本最初のピラミッド十和利山とキリストをつなぐ狼煙のライン
- 280 津軽・十和田に描かれた巨大二等辺三角形
- 284 十和田湖を中継基地とする光通信網があった!
- 287 覆り続ける縄文時代や考古学の定説
- 290 思い込みによる断定が歴史研究を阻害する
- 291 「キリストの本名はトワである」と竹内氏は語った
- 二、超古代十六王家の謎（布施泰和）
- 296 羽根ラインの延長線上に謎の大陸があった!
- 301 十六方位線上に並ぶ古代の理想郷「スカ」

## 第六章 「座談会」古神道と風流と異次元ワールド

- 314 神奈川県の大山はUFOや超常現象のメッカだった！
- 316 口伝で秦野はユダヤの地、隣の伊勢原にはヨセフ塚
- 318 相模湖や大山に霊的スポット、池袋は妖怪だらけ!?
- 321 秋山氏は自家用UFOを二機持っていた！
- 324 本当は超能力者ではなく、歌手になりたかった秋山氏
- 326 天使の輪は頭上にいるUFOのことだった！
- 328 体の中をリサーチするUFOの小型偵察機もある
- 331 ヒトラーはUFOと交信していた
- 334 空間がめくられて神様が出すこともある
- 339 東京タワーのそばの塚にUFOが眠っている!?
- 343 オアフ島の地下には秘密軍事基地があった
- 346 ハーブなどの電磁力兵器は、元来日本人の十八番おはこだった
- 350 謎を解くカギはプラズマ理論とテスラ・コイル

- 374 371 367 364 361 358 355 353
- ダークエネルギーの裏にあるのは「単極磁場」だ！  
 O教授に果たし状？ われわれのUFO観測会に来い！  
 特許つぶしに走るエネルギー業界の「裏の顔」  
 特許をオープンにしても邪魔が入ってしまう……  
 「しゃべる石」アジュライトに隠された秘密  
 宇宙人から渡された50個の謎の石  
 運命を変えるタイミングは神様の領域  
 結果を先に決めて、後から原因を作れ！

## 秋山コラム

- 101 ① インターネットに物申す「名を名乗れ」  
183 ② 宇宙人に連れられて宇宙の果ての壁で見たもの  
307 ③ パラオはバルアルアと霊的な関係がある

## 竹内コラム

- 58 ① 天空浮船を呼ぶ行法と子供の子供のときに見たUFO  
117 ② 織田信長は天皇になる予定だった  
231 ③ 武内宿禰のみが知る超古代・神代文字の歴史  
293 ④ 武内宿禰がしゃべらない理由

## 布施コラム

- 27 ① オープの簡単な見つけ方  
55 ② 河口湖ではなくロンドン五輪に現れたUFO  
57 ③ 瀬戸龍介氏自身が撮影した貴重なUFO写真  
99 ④ 長南年恵と日本の魔女狩り

- ⑤ UFOと麻雀牌の不可思議な関係
- ⑥ 姿が見えないもうひとつのもの
- ⑦ 十六方位線と位山・羽根ライン——幻のパン大陸はいつか浮上する！

第一章



天空浮船（UFO）と  
古神道の世界

UFO 観測会レポート





布施「正統竹内家の口伝には天空浮船を呼ぶ行法というのはないんですか」

竹内「ありますよ。でも、私が呼んだのではつまらない。今日は秋山先生に呼んでもらいましょう。だけど僕はUFOを信じない」

布施「でも、すべてを抱きしめるのが古神道でしたよね。それに天空浮船はUFOかもしれないって、確か言っていたはずですよ」

秋山「あっ、もう三機ほど来ているみたいですね」

## U F O 観測会レポート

布施泰和



### 雨中出现した「見えないUFO」

その日は夕刻から雨が降り始め、止む気配はまったくなかった。前作で約束したように、山、竹内両氏と私（布施）は「美しい国日本のUFO」を見るために、二〇一二年九月二二、二三日、山梨県・河口湖にある秋山氏の知人の保養所に仲間十数名と共に泊まり込み、UFOを呼ぶことにしたのである。

ところがその日は、夕方までは晴れ間が時折のぞくなど何とか天候は崩れずにいたが、外で夕食のバーベキューを食べているころから雨が落ちてきて、土砂降りとなってしまった。その後雨は降り続け、UFO観測どころではなくなってしまったのだ。

やがて、一人、二人と寢床に就き、気が付くと時計は午前四時を過ぎ、中央に薪ストーブの

ある大広間に残っているのは、秋山、竹内両氏とほか二、三名だけになっていた。私はしばらく竹内氏と東北に残る古代遺跡の話をしていた。すると、午前四時一五分ごろであろうか、秋山氏が突然、「何機か来ているような気がする」と言って、外に出たのである。私ともう一人、私の信頼する人が秋山氏の後を追う。外は相変わらず雨が降っていた。木立の間に広がる真っ暗な夜空を見上げると、厚く垂れこめた雲から雨粒が落ちてくるばかりであった。

それでも秋山氏は「やはりUFOが来ていますね。この辺の空を撮ってみてくれませんか」と手で空間を示しながら、私に写真撮影を促した。早速、コンパクトデジカメを取り出して強制発光モードで撮影したのが、①の写真である。右上に写っているのが保養所のひさしで、あとは夜空を背景に雨粒が数滴、フラッシュに反射して光っているだけであった。デジカメの時計の針はそのとき、午前四時一分を指していた。さらにもう一枚、秋山氏の指示通りの方向に向けてシャッターを切った。それが②の写真だ。やはり雨粒しか写らない。

私ともう一人の肉眼では見えないが、秋山氏にはどうやらUFOが見えているらしい。そこで秋山氏は「ちょっとお借りできますか」と言って、私のデジカメを手にとると、自分で角度を定めて、シャッターを押した。それが③の写真だ。結果は無数の雨粒が写っているのみであった。このとき、デジカメの時計は午前四時二〇分を示していた。

秋山氏はあきらめずに数秒間のインターバルの後、再びもう一枚夜空に向かって撮影した。



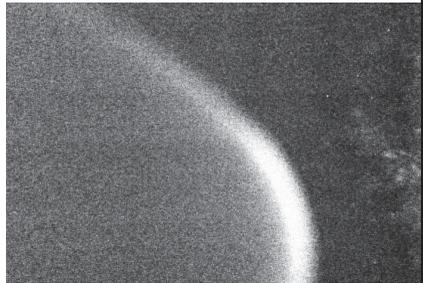
① 雨粒の反射



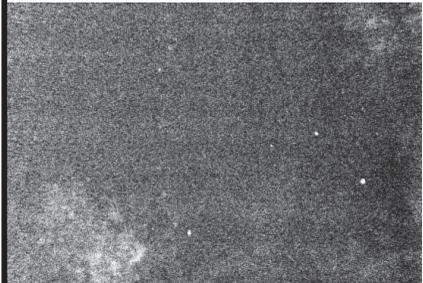
② 雨粒



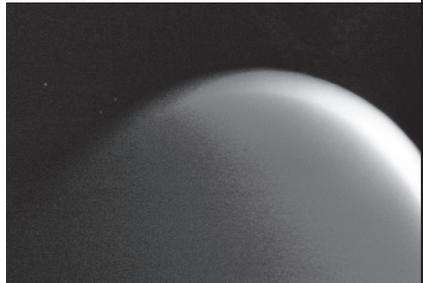
③ 雨粒。秋山撮影



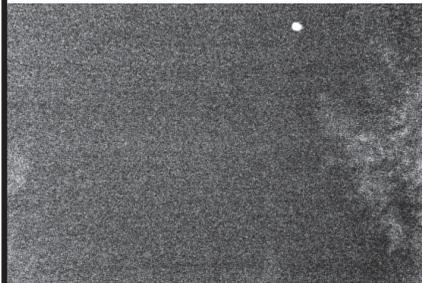
④ UFOのエッジ。秋山撮影



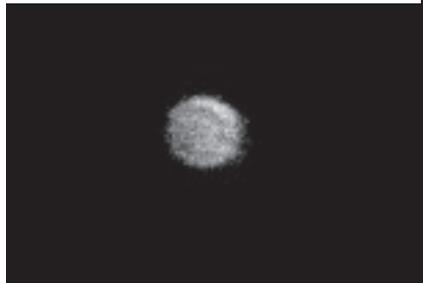
⑤ 雨粒。秋山撮影



⑥ UFO。秋山撮影



⑦ 光の玉



⑧ ⑦の拡大

2012年9月23日未明、布施氏のカメラが捉えたもの

そのときである。「ああ、ちょっと変なのが写った」と秋山氏が私たちに告げた。デジカメのモニターを見ると、非常に変わった、細い光のカーブが写真に写り込んでいたのである。これが④の写真で、時間は午前四時二〇分。秋山氏の説明によると、これはUFOのエッジが写り込んだのだという。UFOは空間を物理的に移動するのではなく、こちらの世界とあちらの世界の間を瞬間移動しながら進むので、非常に撮影が難しいのだそうだ。

秋山氏の写真撮影は続いた。同四時二一分、タイミングを計りながら秋山氏が撮影したのが⑤の写真である。残念ながらこの写真には雨粒が数滴写っているだけで、UFOらしきものは写っていないかった。

さらに数秒置いて同二一分、四枚目の写真を撮影してモニターを見たところ、今度は「あつ、写った、写った」と秋山氏は叫んで、その世にも不思議な写真を私たちに見せてくれた。それが、赤い風船のようなものが写った⑥の写真である。

この写真を見ると、どうやらUFOはすぐ近くにいたようである。つまり、十数メートル離れた木の手前にいたことになる。「まだこの辺にいるはずだ」と秋山氏が言うので、今度は私の信頼するもう一人が、私のデジカメを使って撮影を試みた。その写真が⑦である。撮影時間は午前四時二三分。雨粒とは明らかに異質の光の玉が右上の木立の向こうに写っているように見える。その光の玉を拡大したのが、⑧の写真である。青紫色の球体のような物体が写ってい

た。

私はこの写真を見た瞬間、「これは二か月前に撮影したUFOと同じものだ」と思ったのである。『正統竹内文書の日本史「超」アンダーグラウンド②』の巻頭で紹介したUFO観測会での出来事だ。それもやはり、目には見えない、あるいは見えづらい「UFO」であった。

二か月前の七月三〇日未明に目撃したUFO群についても報告しておこう。

### 物質化する前にオーブとして現れたUFO

観測会は七月二八〜三〇日の二泊三日で富士山周辺の河口湖および山中湖で行われた（この観測会には竹内氏は参加しなかった）。

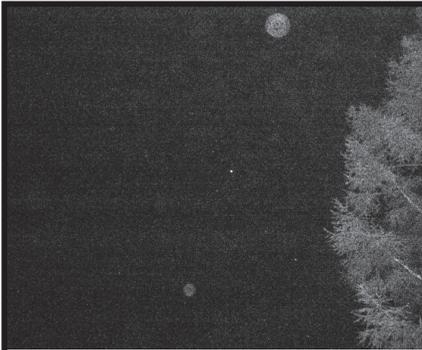
初日の河口湖は空振りだったが、UFOらしきものが出現したのは、その翌日の山中湖近くでの観測会でのことであった。二九日夜から三〇日未明にかけて、ミュージシャン瀬戸龍介<sup>せとりゅうすけ</sup>氏宅で行われたその観測会には、秋山氏や瀬戸氏を含む一名が参加。時折涼しい風が吹き抜ける広いテラスで和気あいあいとした雰囲気の中、雑談をしながらUFOの出現を待ち受けた。異変が起こり始めたのは、午後一一時一二分ごろであった。観測者の一人が撮影した写真にオーブが写ったのだ。それを聞いた秋山氏が「もう（UFOが）来始めているかもしれない

ね」と言う。これをきっかけにして、観測者のほぼ全員が写真撮影を開始。すると、撮れない人も何人かいたが、撮る写真撮る写真、ほとんどすべてにオーブが写り込んだのだ。

観測者の中にはオーブを肉眼で見つけられる人がいたので、私もその人の指示に従ってオーブがいるとみられる方向に向かって写真を撮ると、確かに写っていた。それが⑨と⑩の写真である。いずれも午後一時一四分に撮影した。この夜、雨は降っていなかったし、まずまずの天候であった。だから、雨粒がフラッシュに反射して写り込んだわけではない。虫や埃がフラッシュに反射したのではないかと疑う人もいるかもしれないが、肉眼でオーブが見える人の指示で撮影しており、実は私自身も時折、動いているオーブを肉眼で確認しながら撮影していたのである（布施コラム①「オーブの簡単な見つけ方」参照）。

同一時一七分に撮影した二枚も紹介しよう。オーブだけを拡大した。それが⑪と⑫である。同一九分にフラッシュ撮影した写真⑬には、非常に不思議なことに、オーブではなく明るい星らしきものが二つ写っていた。なぜ不思議かというと、私のコンパクトデジカメでは、三脚を使って長時間露光撮影でもない限り、星は撮影できないからである。

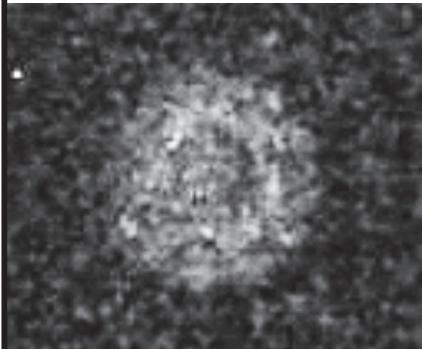
またこのとき、私を含めて何人もがオーブの写真撮影に成功するのだが、面白い現象が起きていた。それは各人によって、オーブの写り方がまったく違うのである。ある人が写したオーブは、画面の半分くらいの大きさに写り込み、まるで薄い泡のようであった。別の人が写した



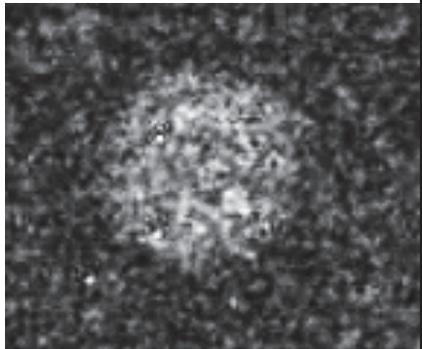
⑨ オープ



⑩ オープ



⑪ オープ



⑫ オープ



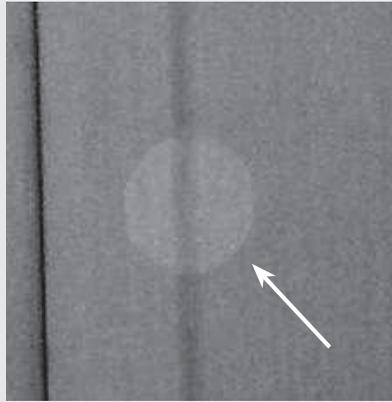
⑬ 次元調整が終わり実体化した UFO ?

2012年9月23日未明、布施氏のカメラが捉えたもの

この方法が正道なのかどうかは知らない。一応、秋山氏にこの方法でいいのか聞いてみたところ、「周辺視野でも見ることができます」という答えが返ってきた。ということは、別の方法、オーブの本当の見方というのがあるのかもしれない。次の本ではその方法についても秋山氏に聞いてみようと思っている。



オーブはこのように背景（この場合は木）の色を変えるので、肉眼でも見ることができる



自分の部屋でピンク色のオーブが飛んでいるような気がしたので撮影したところ、写真にもちゃんと写り込んでいた



カンタベリー大聖堂の壁画オーブ。気になるので撮影したら、壁画の鹿の頭のそばにオーブが写っていた

## オーブの簡単な見つけ方

「オーブの見つけ方」などという、本当は精神世界の重鎮である秋山氏の十八番であり、私はほとんど部外者なのだが、そんな素人の部外者でも実はオーブを見ることができるのである。

元々私は、写真にオーブが写ることはあっても、肉眼でオーブを見ることなどできないだろうと思っていた。同様にオーラもまず見えることはないはずだと思い込んでいた。ところが、オーラを見る方法とやらをネットや本などで調べているうちにオーラがだんだんと（気のせいかもしれないが）見えるようになったのである。ほとんどの場合形だけなのだが、ごくまれに色も現れるようにもなった。

実はこのオーラを見る方法こそが、オーブを見る方法なのである。簡単な方法は、単色の壁や薄曇りの空を背景にして自分の手を目の前に突き出して、深呼吸を繰り返し、心を静かに落ち着けながらその手の輪郭を見ればいいのである。ただしこの時のコツは、自分の手を凝視するのではなく、その先を見るようにする。つまり手の輪郭をぼかしてぼんやりと見るのである。さらに簡単に言えば、平面に描かれた絵を立体視する3D本を見るのとほとんど同じやり方である。それは、対象より遠いところに目の焦点を合わせたまま、ぼんやり見る感じで手前にあるものを見る「平行法」と呼ばれている方法だ。

この方法を使うと、どういうわけかこれまで見えてこなかった別の次元の輪郭とも言うべきオーラやオーブが見えてくるのである。

第二章で詳しく語るが、オーブを最初に見たのは、劇場の幕間であった。単一色のカーテンを背景にして、それは透明なバレーボールのような形で現れてプカプカと浮遊していた。背景のカーテンの色がその部分だけ違う色になるから、そこに透明なオーブがあることがわかるのである。

七月のUFO観測会でも、私は一瞬だけこの方法を使って、木々の手前を浮遊するオーブラしきものを目撃することに成功した。その後は、私よりもオーブやオーラを見るのが得意な方に頼って、オーブがいると思われる方角に向かってシャッターを切ったのであった。

オーブは、大きさは私が撮影したのと同じくらいだが、白く輝いていた。またもう一人の人が撮影したオーブの中心には、宇宙人の「グレー」らしき顔が写り込んでいたのだ。

一〇分くらい撮影したであろうか。オーブの数が少なくなってきたことから、それぞれが席に戻って談笑を続けた。その間私は、秋山氏になぜUFOがオーブのように写るのか、聞いただしてみた。すると秋山氏は次のように答えた。「UFOもこちらの次元に合わせるのに、ちよつと時間がかかるんです。すぐには物質化しないため、最初はオーブのような状態でこちらの世界にやってくるのです」

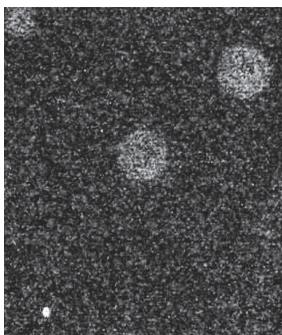
秋山氏によると、こうしたオーブは物質化する前のUFOで、こちらの次元に実体化する前段階で、偵察の意味もあって、よく現れるのだという。すると私たちが撮ったオーブは、この世界で物質化する前のUFOであり、まだ完全にはこちらの世界と一致していない、次元調整中のUFOということになるのだろうか。その説を採用すると、より実体化したUFOが⑬の写真のように「明るい星」として写った可能性もあるのである。

### フラッシュに反応して瞬時に「星々」が光る

それから一時間くらい経った三〇日午前零時半ごろ、再び辺りがざわめいてきた。

そのとき、秋山氏が東南のほうの空を指し示して、次のように言った。「あの辺りに異次元の扉が開いたみたいですね」

皆がその方向を見ると、確かに何かそだけ奇妙な雰囲気であった。同時に今度は、その東南の空の辺りから、小さな星のようなものが現れたのである。そのときの写真が、同午前零時三六分に撮影した⑭だ。そこには、中央と右上の二つのオーブのほかに、左下に明るい星のような光体が写っていた。星のような光体はオーブと違って実体がありそうである。また、集まったり離れたたり、集散を繰り返しているように見えた。その光体自体はまさに星なのだが、実は星のほががないことはすでに述べた。このとき私は、あくまでも肉眼で見える星のような光体、しかもかなり遠くにある光体に向かってフラッシュを焚<sup>た</sup>いているわけだ。当然、フラッシュの光はその星のような物体に届くはずがないのだが、それが実際に写真にも写り込む。なぜ



⑭

星、もしくは遠くの光体がコンパクトデジカメのフラッシュ撮影で写るのか、非常に変な現象が起きていることになるのだ。私は後で秋山氏にその奇妙な現象について尋ねてみた。すると秋山氏は「UFOは懐中電灯にも反応して輝きます。カメラのフラッシュに対しても反応して輝くんですね。こちらが発する光に対して瞬時に反応するのです」と言う。

そうだとすると、UFOはどのような微弱な光にも反応して光を返している。だから遠くにも、フラッシュの光が届いたかのように光って写ることになるわけだ。そこで私は観測中に次のような実験を試みた。カメラのファインダーを覗き込まずに、「星々」がある方向に向けてフラッシュ撮影して、そのとき「星々」がどのような反応をするか様子をうかがったのである。すると驚いたことに、まったくフラッシュが届きそうもない遠いところに「星々」があるにもかかわらず、私がフラッシュを焚いた瞬間に、「星々」のほうが一斉にババババッと光ったのである。こんなことは初めての体験であった。

そのときだ。秋山氏が東の空を指さして「出た、出た！」と叫び声を上げた。その方角を見ると、今までとは明らかに違った物体が空を飛んでいたのである。

### 葉巻型母船登場!? —— 別の空間から聞こえてきた飛行音

その飛行物体はライトを点灯した飛行機のようにであったが、どこか変な感じもした。目視ではかなり低空を飛行しているように見えた。観測者の一人から「飛行機ではないか」との質問の聲が上がる。この時間でも航空機や自衛隊の輸送機などが飛ぶことがあるからだ。それに対して秋山氏は「いや、違う。飛行機はあんな風に瞬間移動して飛ばない。それに回転してい

る」と説明した。

そこで私も注意深く、その飛行物体を観察してみた。東南の空に現れたその飛行物体は、最初見え隠れしながら、我々から見て左の方角、すなわち北の方角に旋回しながらゆっくりと我々のほうに近づいてきた。ところがなぜか小刻みにふらふらと上下動している感じで移動しているように見えるのである。私の家の上空もよく定期的に航空機が飛ぶ。それとは違う不安定な飛び方で、しかも飛んでいる場所はかなり低いように思える。そして何よりも変だったのが、飛行物体の飛ぶ音が我々の後方から聞こえてくることであつた。物体は我々の前をこちらに向かつて飛んできているのだが、音が我々の後方から聞こえて来るのである。普通なら飛行機が飛んだ後から音が聞こえて来る。ところが、時間が逆で飛行物体がこれから向かおうとしている先から飛行音が聞こえてきていることになる。

その飛行物体はやがて左手にある北の森の彼方へと姿を消した。その間、三〇秒から四〇秒くらいであつただろうか。私のコンパクトデジカメでは、飛行機くらいの大きさの夜間の飛行物体は三脚なしでは撮れないことがわかっていたので、撮影はプロのカメラマンの方に頼っていた。そのカメラマンが撮影したのが、前作の巻頭写真である。

この奇妙な飛行物体について、もうちょっと詳しく考察しておこう。まずなぜ、飛行物体の後からではなく先のほうで飛行音が聞こえたのか、という問題がある。最初、裏手の山に反響

して音が聞こえる場合もあるのかなと思ったが、その飛行物体は、その場に停滞することなく、ほぼまっすぐに我々の方向に移動を続けていたから、音だけ先に到着してそれが裏山にはね返るなどということは考えられない。

別の可能性として、我々の後方にも別の飛行物体があり、その飛行音が聞こえていたということもありうるだろう。ただし我々の誰一人として、そのような飛行物体を確認していない。それに目の前の飛行物体が北の森の向こうに消えるとともに、その飛行音も消えていることから、仮に我々の後方に飛んでいた別の飛行物体の飛行音だったとしても、では目の前にいた飛行物体の飛行音はどこに消えたのか、という問題が残ってしまうのだ。

私はこのとき観測していた別の参加者にも、その飛行物体がどのように見えたか聞いてみた。するとその人は、「縦に回転しているのを見たので、間違いなくUFOだと思う」と話していた。何回もUFOを見たことがあるというその人によると、UFOは飛行機に似せて飛びながらも、よく縦に回転したりしてふざけるのだという。

この「母船」とみられる飛行物体はその後、同じ形では二度と現れなかった。また飛行機が上空を飛ぶことも一度もなかった。その代わり、この後ずっと我々が目撃したのは、集まった形を変えたり、飛び回ったり、瞬間移動したりする「星」たちであった。別の言い方をすると、これらは「飛行機に擬態した母船」と「星に偽装したUFO」だったのではないかと

思えてくるのである。

## UFOは星座の形で写り込んでいた！

秋山氏が異次元の扉が開いたようだと言った後、それまでのオーブに加えて、「動き回る星」と「飛行機に擬態したようなUFO」が出現したわけだが、後から私が撮影した写真を確認したところ、面白いことがわかったのである。

私はこのとき、オーブが見えた場所とオーブがいそうな場所、それに「動き回る星々」に向かって一〇〇枚ぐらいシャッターを押した。そして家に帰ってからパソコンで確認したところ、そのうちの八〇%の写真にオーブや星のようなものが写っていたのである。その中で、コントラストや明るさを調整しながら鮮明なものだけを詳しく調べたら、何か見覚えのあるオーブや「星」の配置が浮かび上がってきた。その配置はまさに星座と同じだったのである。

たとえば、三〇日午前零時三六分、すなわち「飛行機に擬態したUFO」が出現する直前には北斗七星に似たような配置をしたオーブと星のようなものが写り込んでいた(写真⑮)。ただし北斗七星の一個が欠けており、形も裏返しになっている。だが、十分北斗七星が連想されるような配置なのである(南斗六星の可能性もある)。本物の北斗七星が写ったのだろうと思

う読者もいるかもしれないが、何度も言うように私のカメラではフラッシュを焚いたら星は写らない。

また「飛行機に擬態したUFO」が林の向こうに消え去った直後の三〇日午前零時四〇分にはカシオペア（写真⑬）が、同零時四一分には北極星のように写真中央の真上に燦然と輝く一等星（写真⑰）が、同四二分にはプレアデス（写真⑱）に似たような配置のオーブ並びに星のようなものが写っていたのだ。そのほかにも四角と直線が組み合わさったムササビのような図形（写真⑲）、中央が二連星の五角形の星形（写真⑳）、中央に一つだけ写ったもの（写真㉑）、白鳥座のような図形（写真㉒）、七つの星が椅子のように並んだもの（写真㉓）、扇形（クジャク？）の図形（写真㉔）、逆正三角形（写真㉕）、正三角形（写真㉖）などが写り込んでいた。そして、この中の北極星を連想させた⑰の「一等星」を拡大したのが⑳の写真であり、これが九月二三日に撮影した「雨中に現れたUFO」（写真⑧）と同じだと思ったわけである。

写真中央の真上にポツンと、まさに北極星であることを指し示すかのように写っている⑰は、非常に重要なヒントを提供しているのではないかと私は思っている。実はオーブは、我々が撮る写真にどのように写り込むかを計算している可能性が高いからだ。拙著『異次元ワールドとの遭遇』（成甲書房刊）でも紹介したが、こちらが意図しなくても写真の中央に巨大なオーブが写り込んだり（写真㉘）、わざわざ滝の真上にオーブが写り込んだり（写真㉙）、英国カンタ



㊸ 位山・蔵立石のオーブ



㊹ 滝のオーブ

ベリー大聖堂の絵に描かれた、女神が乗った鹿の頭のすぐそばに写り込んだりする（布施コラム①参照）わけだ。彼らにとっては、タイミングを計

って決まった場所に出現することなどわけもないように思われるのである。

今回のUFOと思われるオーブおよび光体もそうであった。私が、オーブがいそうな所や、動く星がある辺りをフラッシュ撮影すると、それまで肉眼では見えなかったか、見えづらかった場所に潜んでいたオーブ、もしくは「動く星」が、おそらく私のフラッシュライトが届かないほど遠くにあるにもかかわらず、タイミングを計って一斉に反応して同時に光るのである。つまり私のフラッシュライトを反射して光るのではなく、私のカメラのフラッシュと同時に、どういう仕組みかわからないが、向こうでも光って見せてくれるのだ。だからこそ私の写真にも、オーブや「動く星」が写り込むわけである。つまり彼らは、あえて私のフラッシュに瞬時に反応して光るだけでなく、その瞬間に自分たちの配置が星座になるように位置取りした可能性すらあるのだ。そこまで来ると、もう驚異としか言いようがない。